

西鶴

出席者

松田修 (司会)

広末保

井上ひさし

乾裕幸

谷脇理史



いたづらはやめられぬ世の中に、

後家程心にしたかふものはなき」と或人の語りぬ。

馴染に別れての当座は、

自責、出家にも成べき事やすかり。

程経りて後夫を求るもなきならひにはあらず。

忘れ念記・たくはえに欲といふ物ありて、

うきながら跡立るも身をおもふ故ぞかし。

蔵の鍵に性根をうつし、

めしあはせの戸にくろくをおとし、

用心時の自身番にも人頼みするこそあれ、

いつとなく前裁は落葉に埋み……「好色」代男・髪きりても捨られぬ世より

シンポジウム 日本文学 9

学生社

出席者略歴

まつた・おさむ 1927年生ま。京都十学卒業。現在国文学研究資料館教授。主要著書は『日本近世文学の成立』『日本芸能史論考』（以上法政大学出版局）『刺青・性・死——逆光の日本美——』（平凡社）『關・ユートピア』（新潮社）など。

ひろすえ・たもつ 1919年生ま。東京大学卒業。現在法政大学教授。主要著書は『元禄文学研究』（東京大学出版会）『もう一つの日本美』（美術出版社）『辺界の悪所』（平凡社）『近松序説』（未来社）など。

いのうえ・ひさし 1934年生ま。上智大学卒業。作家。『手鎖し中』『第67回直木賞』を受ける。

いぬい・ひろゆき 1932年生ま。岡山大学卒業。現在親和女子大学教授。主要著書は『初期俳諧の展開』（桜楓社）『古俳書目録索引』（赤尾阿文堂）『古典俳文学大系』『真門俳諧集二』『淡林俳諧集一』『淡林俳諧集二』（以上共著・集英社）など。

たにわき・まさちか 1939年生ま。早稲田大学卒業。現在筑波大学助教授。主要著書・論文は『日本古典文学全集』『井原西鶴集Ⅲ』（共著・小学館）『貞享三年の西鶴——跡見女子大紀要第6号』など。

司会者の読解により検印を省略します 519

シンポジウム日本文学 8

西 鶴

昭和51年9月10日 初刷印刷
昭和51年9月14日 初刷発行

司会者 松田 修
発行者 鶴岡 隆巳

略行所 株式会社 学生社

東京都千代田区九段南2-2-4(郵便番号102)
電話03(263)2611(代)振替・東京1-18870番
編集担当 堀 健二郎

浴丁・乱丁本はおとりかえします
Printed in Japan

西鶴



出版者

松田修

広末保

井上ひさし

乾裕幸

谷協理史

シンポジウム 日本文学

9

出席者

松田修(司会)

広末保

井上ひさし

乾裕幸

谷脇理史

装幀

杉浦康平＋鈴木一誌

□シンポジウム 日本文学——西鶴・目次

第一章 西鶴文学を語る

《出席者》

松田 修
広末 保
井上 ひさし

| | |
|-----------------------------|----|
| 「帰ってきた男」から…………… | 二 |
| 西鶴の文体…………… | 三 |
| 小さな巨人…………… | 一五 |
| 日本文芸の「本歌取り」のかたち…………… | 一六 |
| 近世のパロディの出発点…………… | 二 |
| 西鶴における時間と空間…………… | 三 |
| 近世の性感覚…………… | 二四 |
| 好色丸の最後の船出…………… | 二七 |
| 西鶴における数の意味…………… | 二八 |
| エグザイル西鶴…………… | 三〇 |
| 西鶴の言葉の意味…………… | 三三 |
| 言葉の羅列と喚起力…………… | 三四 |
| 近代における言葉の機能…………… | 三七 |
| ジャーナリズムの問題——西鶴の時代と現代——…………… | 三九 |
| 西鶴文学の読者層…………… | 四〇 |
| 西鶴と大阪…………… | 四一 |
| 西鶴における歴史小説的な面…………… | 四二 |
| おわりに…………… | 四三 |

第二章 西鶴における俳諧の意義

《報告》 乾 裕 幸

| | |
|-----------------------------------|----|
| 《報告》からの問題提起…………… | 五 |
| 通説への疑問——談林俳諧から浮世草子へという図式は正当か…………… | 六 |
| 貞門俳諧の意義と位相——俳言の問題…………… | 六 |
| 談林俳諧における言語革命の位相…………… | 六 |
| 談林の二傾向——俳言主義と寓言主義…………… | 六 |
| 西鶴俳諧の位相——その古さと新しさ…………… | 六 |
| 連歌の座と俳諧の座と…………… | 六 |
| 貞門の座と談林の座…………… | 七 |
| 談林の座における共有イメージの解体と創出…………… | 七 |
| 俳諧師西鶴の姿勢…………… | 七 |
| 談林俳諧の素材と認識領域の拡大の問題…………… | 七 |
| 矢数俳諧の問題…………… | 七 |
| 矢数俳諧の場と状況…………… | 八 |
| 西鶴の正風意識——俳諧師西鶴の位相…………… | 八 |
| 俳諧師西鶴と小説家西鶴と…………… | 八 |
| 禁忌をとりあげることの意味…………… | 八 |
| 非俳諧的要素の導入と西鶴の散文の成立…………… | 九 |
| 虚実の問題——「どこにあらふぞ雪の笋」をめぐって…………… | 一〇 |
| 西鶴の社会意識——「天下にさはり申候もなし」をめぐって…………… | 一一 |
| 正風意識と動き行く状況…………… | 一二 |

第三章 作家西鶴の出発——『好色一代男』を軸に——

《報告》谷協理史

| | |
|----------------------------|----|
| 『一代男』論の対立点と問題点…………… | 二九 |
| ① 西鶴を読む時の立脚点…………… | 三〇 |
| ② 西吟跋文を『一代男』評としてどう読むか…………… | 三三 |
| ③ 西吟の読み方が提起する問題…………… | 三三 |
| ④ 主人公世之介の意味…………… | 三四 |
| ⑤ 西吟評の有効性と『一代男』の作品構造…………… | 三六 |
| ⑥ 作家西鶴の出発と世の人心への関心…………… | 三七 |
| 西吟跋文の解釈をめぐって…………… | 三八 |
| 「人の心」への視点と西鶴の作家的出発の問題…………… | 三三 |
| 俳諧師西吟の跋であることの問題…………… | 三四 |
| 主人公世之介のイメージをどうおさえるか…………… | 三七 |
| 世之介のヒーロー性とアンチ・ヒーロー性…………… | 三九 |
| 『一代男』の成立過程をめぐって…………… | 四〇 |
| 一気に書きおろしたか、編集の過程があったか…………… | 四一 |
| 編集説と文体・構成の問題…………… | 四二 |
| 世之介のヒーロー性…………… | 四七 |
| 「転合書」の問題…………… | 四九 |
| 俳諧的発想と姿勢…………… | 五一 |
| 西鶴をどう読んで行くべきか…………… | 五三 |

第四章 西鶴の全体像をどうとらえるか

《報告》 松田修

《報告》の補足説明……………一四

町人作家西鶴という想定は無意味さについて……………一六

西鶴の発想の基層的部分は何か……………一七

基層的部分を問題にすることの意味……………一七

制外者西鶴——文学者としてのあり方……………一七

俳諧師西鶴と小説家西鶴——神仏の表現をめぐって……………一八

西鶴の姿勢——居直りの問題……………一八

西鶴研究の課題と今後の問題……………一八

あとがき……………一八

索引……………一九

西

鶴

* 挿図は、天理図書館、国立国会図書館らのご好意により掲載できました。お礼を申しあげます。

第一章 西鶴文学を語る

《出席者》 松 田 修

広 末 保
井 上 ひ さ し

「帰ってきた男」から

松田 西鶴とその作品についてシンポジウムを行うことになりました。今日はその第一回で、ゲストとして、近世文学になみなみならぬ関心とユニークな見解をおもちである、作家井上ひさしさんにご出席いただきました。なんでも井上さんは、久しく西鶴を踏まえた作品を計画中と仄聞しておりますけれども、その情報は間違いですか。

井上 これは広末さんによつと関係があるんですけれども、『懐硯』の中に広末さんが「帰ってきた男」で取り上げられた短編がありますね（広末保『抜け穴の首陥和四七年、平凡社。あの段階からもうちょつと引き伸ばして、「失踪者とそっくりの男が帰ってきた」という話を引き継いで、そっくりの男がある人間に成り代わるには、一種の教育が行われるわけですね。まず、家族の年とか名前とか商売、番頭の名前とか性格、町の名前とか、全部知らなきゃいけないわけです）。

それを全部学習して乗り込むんですけれども、自分が成り代わっている人間の表だけしか勉強できないわけですよ。

成り代わっている人間の秘密の部分は、どこからも学習できないわけですね。

ぼくはあれを引き継いで、自分はまだまと若旦那に成り済ましたと思っっているんですが、若旦那には隠し女はいるし、借金はあるし、しかも人に付けねらわれているし、という話を、後半にポイントを当てて、『西鶴』の続編を書くつもりで準備していたんですよ。

そうしましたら、平凡社から広末さんのあの本が出たんです。その「帰ってきた男」というのは、パッチリと小説になっっているわけですね。これはまずいというんで、延ばしに延ばしているんです。せめて広末さんとなんとか渡り合いたいというんで、少し勉強して固めているんです。それが、次の次ぐらいにでき上がると思います。

ある金持の若旦那に成り済ますそっくりの男という話は、芝居になると思いますが、二年ぐらいかかっていますけど、なかなかできないんです。

広末 それは芝居ですか。

井上 ええ、芝居です。一人二役でやりますと、非常におもしろいですね。

松田 帰ってきた男というのは、かなり普遍的なテーマですね。

井上 シンデレラ物語ですよ、前半は。最後に、マイナス版のシンデレラになってきて、当人だけしか知らないいろんな秘密がどんどん出てきて、しかもそれは全部「芝居」で、いなくなったと思っっていた若旦那が、じつは生きていて、ある目的で、そっくりの男をはめるために全部おぜん立てして、そのはめられた男というのは、最初はシンデレラになったつもりでいい気になっているんですけれども、だんだん変なことが起きてきているうちに、いろんな責任を背負わされて、結局、死ななきゃいけない、というお話を作っているんですが、なかなかうまくいかないんです。

ずっとぼくは広末さんの本に非常にその恨みがあったものだからね。こんなにやっていらっしやる人があるんでは、ぼくはダメだというんで。かなり悪口を言っつて、申しわけございません。(笑)

松田 いかがですか、恨まれている広末さんのご感想は。

西鶴の文体

広末 西鶴の話になれば、つまり西鶴をどこでつかむかということにもなるけれども、たとえば文体でも、『懷硯』なんていうのは非常に違う文体ですよ。

松田 均質化されたいわゆる「西鶴の文体」とは違うということでしょう。統一的な、「西鶴の文体」などというものが、はたしてありうるかどうか。

広末 そうそう。それはたとえば『男色大鑑』なんかの後編の部分なんかでも、非常に文体が違う。そうすると西鶴というのは、仮に西鶴というのを個人というふうに考えれば、かなりいろいろな文体をいろいろなところで模索しているんじゃないか、という気がしますね。

松田 そうすると、文体の面だけからいっても、一編一編が実験小説性を持っている……。

広末 意識的かどうかは別だけれども、かなり意識的な部分もあるような気がしますね。だから、あの段階になっていきなり散文のいろんな形を手探りせざるをえなくなってきたということとは、別に近代的な意味ではなくって、いちおう考えられるのではないかという気がしてゐるんです。

だから、文章のおもしろさを読み込んでいくというのが精いっぱいみたいな感じですね。西鶴を論ずるよりも、おもしろければいいということも、それと関係があるだろうし、もう一つは、これはぼくらがそうだったし、もっと前の人もそうだったし、いまでもそういうところがあると思うんだけれども、論じると、だいたい西鶴でなくなってきたんです。読んだ実感と論じたものが非常に離れておいて、それはやはり方法的に言って、西鶴をとらえていく方法、つまり論理化していく方法、あるいはカテゴリー（概念）みたいなものはまだない。したがって近代的なもので論じていく。ぼくは、西鶴のおもしろさを再現するような論文でなければならぬと思うんだけどね。

松田 たしかに……。でなければ、文学の論文ではないと思います。最初に「西鶴をいかに感受したか」ということがあって、その感受が論理化されていく。そして、客観性・普遍性を持つというのが論文でしょう。いかにおもしろかったか、あるいはいかにおもしろくなかったかが、研究の基点です。享受と論との間にギャップがあるとしたら、感じ方が間違っていたのか、論理化していく方法が間違っていたのか……。

広末 ぼくは、感じ方は、おそらくみんなそれなりに感じていると思う。そうでなかったら、退屈で読めないと思う。そうして読んでいるということは、本当はべつに自然主義的に読んでいるわけでもないだろう。だからあんなおびただしい作品を、そう退屈もしないで付き合っていられる。

しかし、それを意識化しようとするときに、いわゆる手持ちのカテゴリーで論理化してしまったという慣習からなかなか離れられない。ちゃんと論理的に整合しようとする、ムリが出てくる。

だから、西鶴の場合は、ちゃんと体系的に論じるというのをいっぺん放棄したほうがいい、というようにさえぼくは思います。もっとおもしろさを、部分的にでもいいから、何がおもしろいかというのを断片的に語っていくというところから始めるしかないのではないかと、ときえ思うわけです。そこから非常にナイーブに始め直したほうがいいのではないかと、という気がしますね。

井上 そうですね、たしかに。いまの広末さんの話を引き継いで言いますと、ぼくは昔から近松は読んでいたんです。近松というのは、そう言うところの近松の専門家の方はお怒りになるんでしょうけれど、一作か二作読むと、「ああ、ここで語呂合わせで迫ってくるな」とか、わかるような気がするんです。

松田 構想と文体においてパターンがあるから、大体のあたり（見当）がつくわけです。

井上 そうです。ところが西鶴というのは、「すごく下手な文章を書くな」と、生意気に思ったり、「とんでもないどぎに交（まじ）りすぎたり、一つ一つの作品でちょっと違っている。ぼくがチャランポランに読んでいるせいもあるんですけど、でも、では一人の作家として西鶴というのはどうかということが、一言なり二言なりで言えるかというところ、まったく何

にも言えないんですね。やっぱりわからないんです。

ただ、よくもまあこれだけいろんなことを、どこからネタを仕入れたのか、ほんとうに感心しますね。何かそういうエネルギーのすさまじさみたいなものと、いったいこの人は大阪にすわっていて、どうやってこういうネタを集めたのかということがちょっと不思議で、「週刊新潮」の「黒い報告書」を読むみたいな興味のあるところもありますしね。

「ある部屋へ行くと、部屋のすみに丸い穴が空いていて、そこに女が寝転ぶと、下に男が寝転んでいる」というようなのがありましたね。(笑)

松田 「忍び宿の話」(『好色一代男』四の五)ですね。

たしかに「黒い報告書」的要素が濃厚です。

小さな巨人

井上 ぼくは、そのへんはよく知らないんですが、西鶴は生きている当時から大作家と思われていたわけですか。

松田 広末さん、どうでしょう。

広末 作家という概念がちょっと問題になってくると思いますね。しかし、やはり超一流だったのではないですか。ただ、西鶴の文学と言った場合、西鶴の文学というのはいったいなんで文学なのか、どこが文学なのか、そういうことが……。

ぼくは、一度文学なんていう言い方は全部捨ててしまって、ただ文章で書いたものとして読んでいくところから始めないといけないと思う。文学だ、文学だという攻め方をしていて、何か落としかけてしまおうのではないか。それはべつに、否定的な評価の意味ではなくて、そういうふうに感じる必要がありますね。

松田 西鶴における西鶴的なるものとは何かという問題は、いつも念頭に置きながらなかなか結論が出せないのです。